

## 奈良・丹切遺跡<sup>たんぎり</sup>

- 1 所在地 奈良県宇陀郡榛原町大字萩原
- 2 調査期間 一九九二年(平4)四月～六月
- 3 発掘機関 榛原町教育委員会
- 4 調査担当者 柳澤一宏
- 5 遺跡の種類 遺物散布地
- 6 遺跡の年代 縄文時代後期～一四世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(桜井)

丹切遺跡は、榛原町の市街地南側に位置し、背後(南側)には丹切古墳群が広がっている。この遺跡の周辺は宇陀地域の交通の要衝ともなっており、大和と伊勢・伊賀、吉野などに通じている。

遺跡の立地は、宇陀川の河岸段丘とこれに接する丘陵南斜面の谷部分と丘陵部分にあたり、標高約三〇八～三五〇mで、南北約七～八〇〇m、東西約三～四〇

〇mが遺跡の範囲と推定される。

遺跡の東南部分において、民間業者による宅地造成工事が行なわれることとなったため、榛原町教育委員会が一九九二年度の受託事業として発掘調査を実施したもので、調査面積は約四五〇㎡である。発掘調査は、谷部とそれに隣接する尾根上をその対象地としており、谷部分では延長約二五〇m、幅約一五～三〇mの自然流路を検出し、その埋土内から弥生時代後期から中世にいたる各時期の遺物が出土した。なかでも下流部分において、その数量は多い。自然流路には護岸施設等は認められない。なお、自然流路周辺では、建物跡等の遺構は検出していない。

自然流路内からの出土遺物が大半を占め、整理用コンテナにして約二〇箱を数える。主な出土遺物として、サヌカイト片、瑪瑙片、弥生土器(壺・甕・高杯)、須恵器(杯・壺・甕・瓶)、土師器(皿・杯・碗・甕・土釜)、黒色土器(杯・皿・壺)、墨書土器、製塩土器、灰釉陶器(皿・壺、瓦器(碗)、瓦、フイゴ羽口、銭貨(和同開珎・隆平永宝・寛平大宝)、鉄釘、鉄板、木製品(木簡・下駄・曲物ほか)、自然遺物(種子・馬骨)などがある。墨書土器(黒色土器・土師器)には、「□家」「子」「□井門」「□井」などと記されている。これらの遺物のうち、平安時代(九世紀後葉から一〇世紀中葉)のものが最も多く、木製品等はこの時期に含まれるものと考えられる。

木簡、墨書土器、和同開珎等の出土によって調査地周辺に何らか

の公的施設の存在も予想され、瓦葺建物、鍛冶工房等もあった可能性が高い。榛原町萩原を中心とする地域には、「萩原荘」があり、一〇世紀中葉には東大寺尊勝院領荘園であったことが『東大寺統要録』にみえ、丹切遺跡はこの荘園に含まれるものと考えられる。また、この遺跡は宇陀地域の交通の要衝に立地することから『日本書紀』壬申紀にある「菟田郡家」にかかわる遺跡とも推定できるが、今はまだ、これを明らかにできない。今後の検討を期したい。

# 8 木簡の釈文・内容

(1)

・計□  
〔平カ〕

・□

(46)×19×5 019

(1)は自然流路の埋土中より出土し、伴出土器から一〇世紀中葉以前に比定される。下半部分は焼失している。ほかに判読不能の短冊型木簡一点、墨画とも習書とも考えられる曲物の底板状の断片一点も自然流路内から出土している。

# 9 関係文献

榛原町教育委員会『榛原町埋蔵文化財発掘調査概要報告書 一九九二年度』(一九九三年)

(柳澤一宏)

向日市埋蔵文化財センター

## 『長岡京木簡 二』の刊行

本冊には、一九八四年刊行の『長岡京木簡 一』以後、三〇調査区から出土した合計一〇八二点の木簡を収載している。主な調査地は、左京三条二坊八町の太政官厨家跡、同九町の造長岡宮使関連施設、嶋院木簡出土地、北辺官衙区中央官衙等である。また最新の研究成果として、木簡の製作技法と製作者・製作地との関係、造長岡宮使所在地の検討などを掲載する。

図版 B4判 七四プレート、解説 B5判 二〇〇頁

頒価 一万円(送料込み)

申込先 617京都府向日市鶏冠井町上古二三

向日市埋蔵文化財センター総務係  
(TEL〇七五―九三二―三八四一)

銀行振込 京都銀行向日町支店 普通預金 番号六一〇一四四  
向日市埋蔵文化財センター 理事長 草木俊次郎